

がんサバイバーとなった看護師に関する文献レビュー

Literature Review on Nurse Who Are Cancer Survivors

小幡明香

OBATA sayaka

茨城キリスト教大学

Ibaraki Christian University

Key words:がんサバイバー, 看護師, 復職

目的

全がんの相対5年生存率は69%であり、がんはつきあう病・治る病として捉えられている(全国がんセンター協議会の生存率共同調査[2022年11月集計])。対人援助を行う側である看護師も当然がんに罹患することもあり、さらに、がんサバイバーとなった後も看護の仕事を継続することが少なくない。しかし、がんサバイバーとなった看護師が、看護の仕事を継続する上でどのような変化や課題があるのか等については、ほとんど明らかにされていない。

そこで本研究では、国内外の文献から、看護師ががんサバイバーとなったことにより生じる変化や気づきについて明らかにすることを目的とする。

方法

文献の検索にあたり、データベースはPub Med およびCINAHL、医学中央雑誌Web版を用いた。英語文献は「cancer」、「nurse」、「survivor」、「experience」、日本語文献は「がん」、「看護師」、「サバイバー」、「経験」を組み合わせて、過去全ての原著論文を対象として検索した(検索日2023年7月31日)。

目的に合致する記載があるか、タイトルおよび抄録を確認し、判断できない文献は本文を精読した。

倫理的配慮として、対象論文の結果が示す意味を損ねないように忠実に記載し、著作権等を侵害しないよう配慮した。

結果

検索および論文の内容を確認した結果、11文献が抽出された。研究方法では、ケーススタディ等を含む質的研究が9件、質問紙調査による量的研究が2件であった。がんサバイバー看護師の国籍では、米国4件、日本3件、韓国2件、オーストラリア1件であった。がん種では乳がんが最も多かった。

看護師ががんサバイバーとなったことにより生じる変化や気づきに関連する記述を抽出し、整理した。看護師としての専門知識があるからこそ、病態をよく理解することができ、治療や症状に対して、人的リソースの選択

や自らコンサルティングを行うなどの実践的な対処をとることができていた。その一方で、役割の曖昧さ、つまり援助を行う看護師という役割と援助を受けるがんサバイバーという役割が混在し、時として患者になりきれない状況が生じていることが明らかになった。また復職後は、がんサバイバーの経験により看護観の変化、共感能力の向上などが自覚され、看護実践に還元されていた。自らのがん経験を患者のために開示することもあるが、自らの許可なく上司や同僚により開示されひどく傷ついた経験も有していた。治療による後遺症や副作用に対して試行錯誤しながら看護師として勤務を続けられるよう模索しており、職場との調和や同僚との関係性が仕事の質に影響することが明らかにされた。

考察

2023年から開始された第4期がん対策推進基本計画では、がんとの共生分野の分野別目標のひとつに就労支援が挙げられている。がんサバイバーとなったあとも、援助者として復職する看護師が増加すると予測される。がんサバイバーであることが看護実践に還元され、より良い看護の提供に繋がっているという利点が示された。しかしその一方で、看護師である自分とサバイバーである自分が混在することで生じる役割の曖昧さによる苦悩や、治療に伴う後遺症や副作用により、本来であれば実施しなければならない業務の一部ができなくなるという難点も生じていた。がんサバイバーとなったことの強みを意識しながら、後遺症や副作用と付き合いながら勤務ができるように、職場とサバイバー看護師が無理のない範囲で業務を調整し合う必要性が示唆された。

文献

厚生労働省(2023). 第4期がん対策推進基本計画について. 2023年8月22日取得, <https://www.mhlw.go.jp/content/10901000/001091843.pdf>.

全国がんセンター協議会(2023). 全がん協生存率. 2023年8月22日取得, <https://kapweb.chiba-cancer-registry.org>.